



No. 5 (2005年3月発行) 発行：北海道海洋生物科学研究会

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1. 私が会員です (第7回) | 一宮 慎吾さん (札幌医大 第一病理) |
| 2. 私が会員です (第8回) | 内田 卓志さん (北水研) |
| 3. 私が会員です (第9回) | 栗原 秀幸 (北大院水) |
| 4. 事務局日より | |

1. 私が会員です (第7回)

一宮 慎吾さん (札幌医科大学医学部第一病理学 講師)

病理学は古くから「疾病の理を追求する学問」とされ、現在では外科病理学と実験病理学の二つの柱からなります。前者は臨床的に問題となるヒト組織を直接扱い悪性か否かなど病変部の性格を明らかにする学問です。後者は病変がどの様に理解するかを多角的に研究することを目的としています。このように病理学はその間口が極端に広く、世界中の病理学講座の研究テーマをまとめると、病気に関わる全ての生命現象が含まれることなのでしょう。私の場合はヒト胸腺の機能に注目しています。免疫系を司るT細胞の発達と間質細胞の関係を調べており、その機能調節分子としてp53関連分子を主軸に研究しています。趣味は休日にかみさんの目を盗んでバイクに乗るのですが、最近ではすぐにバテてしまってバイク磨きに費やす時間が多くなっています。

北海道海洋生物科学研究会との関わりは札幌医大臨海研究所の高橋延昭先生のご高配によります。高橋先生は大学院時代から大変お世話になり、また個人的なことで申し訳ないのですがこの研究会の沖野龍文先生とは札幌北高時代の同級生です。私は平成2年に札幌医大を卒業し第一病理の大学院生となりました。研究テーマは免疫担当分子である非古典的MHC(主要組織適合抗原)クラスI分子の機能解析で、主に解析したのはCD1という分子です。これは古典的MHCクラスI分子と構造が酷似しているものの遺伝子座が異なっている奇異な分子で、ラットやスナネズミ、ハムスターなどとひたすら格闘してサザン解析やクローニングを行い、分子進化的なことも解析しました。CD1は今ではナチュラルキラーT細胞のターゲットとして位置づけられており、当時はこのように脚光を浴びる分子になるとは夢にも思っていませんでした。大学院卒業後はペンシルバニア大学病理学講座に留学し病理学に関する多くの経験をさせていただきました。その後は縁があって千葉県がんセンター生化学研究部に在籍しました。この時は免疫学から少し離れて腫瘍発生の分子機構を解析し、神経芽腫のサブレッサー領域である染色体1p36に位置するp53腫瘍抑制遺伝子類似のp73を研究しました。その後再び札幌医大に戻り現在に至っています。

振り返りますと、様々なラボの素晴らしい先生方にお会いできた結果が私の今日であると思います。何か一つのテーマで道を歩んで来た訳ではなく決してきれいな自己紹介とは言えませんが、若い先生方に唯一勧められることがあるとすれば、チャンスがあれば国内外を問わずダイナミックに研鑽を積んで欲しいということです。北海道は多くの天然資源に恵まれ、またいろいろな分野で独創的な考えを持つ

ているひとが大勢おられます。北海道海洋生物科学研究会がそれらをさらに生かす方略について、これからも数多く発信されることを願ってやみません。益々のご盛会となりますことを祈念しております。



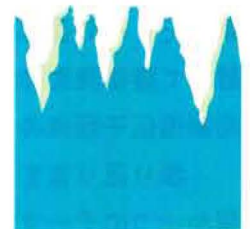
2. 私が会員です (第8回)

内田 卓志さん

(独立行政法人水産総合研究センター

北海道区水産研究所)

3年前に広島県にある瀬戸内海水産研究所から現在の北海道区水産研究所に異動してきました。本来の専門は植物プランクトンを中心とする藻類の生活環や生理生態ですが、現在は水産増養殖全般を対象としています。大学、大学院は札幌、室蘭で過ごし、その後神戸、広島と渡り歩いて、釧路には単身で赴任してきました。理学部生物学科の出身ですが、水産分野とは大学院時代から馴染みが深く、室蘭港で発生した赤潮や噴火湾で起こったホタテガイ毒化の原因種の生理生態研究等に関わりました。その後水産研究所に移ってからは、西日本を中心に発生した、貝類を直接殺すヘテロカプササーキュラリスカーマという新奇な渦鞭毛藻の赤潮やアコヤガイの赤変・大量斃死など、沿岸域の様々な事象に巡り会い、今振り返ってみれば、主に水産生物の被害軽減対策の面から研究を行ってきたようです。現在、陸域の影響を包括した、沿岸生態系の解明・保全に興味を持っており、関連した研究プロジェクトにも関わっています。沿岸域は陸域からの影響が直接影響を及ぼす場所であり、陸域から負荷される窒素やリンなどの栄養物質がどのように利用され、循環しているか、ということをも明らかにして、水産の立場から河川や農地など陸域の管理に提言を行うというものです。しかし、生産力の維持向上、健全な沿岸生態系、生物多様性の保全などと一口に言いますが、これらを実際に評価するための指標のとり方が大変難しく、いつも頭を悩ませています。また、沿岸生態系には、藻場・干潟が重要な位置を占めていますが、これらの造成や適切な維持管理も重要な研究対象であり、沿岸域の多面的な機能をいかに効果的に引き出すかといった、ともすれば机上の空論になりそうなことを、具体的に研究実施レベルまで持っていくことが重要な課題です。本研究会等を通じて、様々な分野の方々と情報を交換することは、凝り固まった頭に栄養剤を注入する効果があると信じています。今後とも宜しくお願ひ致します。



3. 私が会員です (第9回)

栗原 秀幸 (北海道大学大学院水産科学研究科)

ニュースレターの編集担当で皆様にお世話になっております。私の主要な研究分野は「海藻の天然物化学」です。北海道南部及び東部に生育する海藻に含まれる各種酵素阻害活性物質を探索しています。特に、食品素材としての応用を想定して、経口摂取して排泄されるまでの口から大腸までに存在する人の疾病に関わる酵素に対する阻害物質を対象にしています。

さて、私の履歴は海とは関係のないところから始まっています。北海道倶知安町出身で海のないところに生まれました。大学も「田畑で作物に関する何かをやりたい」と北海道大学の農学部を目指し、同大学理Ⅱ系という化学主体の教養部に入学しました。そこで、第1の出会い「有機化学との出会い」がありました。教養部時代に化学Ⅱとして有機化学を修得するのですが、その科目の担当が鈴木稔先生(当会代表幹事)でした。先生の授業で有機化学に初めて触れ、海藻の臭素化テルペン類の話なども盛り込まれていました。「有機化学っておもしろいな」と興味を持ち始めました。学部は当初目指していたとおり農学部農芸化学科に進みました。そこで、第2の出会い「天然物化学と生物間相互作用物質との出会い」がありました。恩師水谷純也名誉教授、現主宰の田原哲士教授(生態化学)、指導を賜った川端潤教授(現食品機能化学)の研究室で、「野生陸上植物の防御物質」という「植物自身と他の生物との相互作用物質」に関する天然物化学の世界にのめりこんでいきました。「田畑で作物と戯れる」という目標は吹っ飛んでしまいました。修士課程修了後、1年の化学系メーカー勤務を経て、北海道大学水産学部食品化学講座(羽田野六男名誉教授、高橋是太郎教授)に奉職する機会を得ました。そこで、第3の出会い「野生海洋植物=海藻に含まれるヒトへの作用物質=食品に関わる天然物化学との出会い」がありました。これまで温かく研究を見守っていただいた当研究室を主宰してきた両先生には「海洋生物の科学」を研究する場を与えていただき感謝しています。当初の目標と全く異なることを行っておりますが、素晴らしい先生方とのいくつかの偶然の出会いによって「海洋生物の天然物化学」というわくわくする研究分野に出会えたことを喜んでおります。

水産学部に着任した当時、海洋天然物化学に関する情報を入手するのが困難でした。途方にくれていたところ、D. J. Faulkner 先生が Natural Product Reports という書誌に定期的に新規海洋天然物の総説を書いていることを知りました。所蔵を調べると鈴木稔先生の研究室であることがわかり、きちんと挨拶もしていなかった先生に「コピーを送ってください」と頼みました。先生には快諾していただきました。「ものを知らないということは恐ろしい」もので、数十ページ程度送られてくるのかとおもっていたら、送られてきたコピーに仰天しました。何年分もその総説を送っていただき、二つ折りにして十センチにも達しようかという厚さでした。その後何年も私や指導している学生がこのコピーから情報を得ていました。私の海洋天然物化学研究は鈴木稔先生のご協力なしには始められなかったと言っても過言ではありません。先生には深謝の気持ちしかございません。

この会への参加によって、新たな偶然の出会いを経験でき、いろいろな刺激を受けることができました。当会の会員皆様と1年に1度お会いできることを本当に楽しみにしております。これからも微力ですが、ニュースレター編集の作業で貢献できればと思います。



4. 事務局だより

1) 住所録の作成

これまで、ニュースレターに会員の方の氏名のみ掲載してきましたが、会員間の交流の助けとするため、年1回程度会員の氏名・所属・住所・電話番号などをニュースレターに掲載したいと考えています。最近は個人情報の流出に過敏とならざるを得ず、スパムメールに悩まされている会員の方も多いため、この住所録の作成について、特に電子メールアドレスを掲載してよいかどうかのご意見を事務局沖野 (okino@ees.hokudai.ac.jp) までお寄せ下さい。また、住所・電話番号の掲載が不都合な方もお知らせ下さい。

2) 会員募集

現在会員数30名となりましたが、引き続き新会員を募集します。団体としての入会も可能となりましたので、ぜひ賛助会員第1号になっていただける方にお声をかけてください。入会希望の方には払込票をお送りしますので、ご連絡下さい。

年会費は、一般会員1,000円、学生会員500円、賛助会員(団体)10,000円です。

3) 年会費納入のお願い

平成16年度分の会費未納の方は郵便振替で払い込んで下さい。その場合は、4月からは新年度ですので、17年度分も併せて納入いただけると助かります。

口座番号 02700-1-93161 加入者名 北海道海洋生物科学研究会

・本会に関する問い合わせ・入会希望は、事務局(沖野 龍文) TEL011-706-4519、電子メール okino@ees.hokudai.ac.jp

・ニュースレターへの情報提供・投稿などに関するお問い合わせは、ニュースレター編集担当(栗原 秀幸) TEL0138-40-5561、電子メール kuri@fish.hokudai.ac.jp までお願いします。



編集後記

夏が高温だったからなのか、この冬は低温とドカ雪でした。これも自然の「平衡」なのでしょう。まだまだ寒い日が続いておりましたが、日差しは春を感じさせるようになってきました。皆様におかれましてはお体ご自愛ください。よい新年度でありますようお祈り申し上げます。発行が遅れました。申し訳ございません。(栗)